

ツマグロヨコバイ越冬世代幼虫の寄生植物

村田 全・野田政春・高崎登美雄・*立石 焜
(福岡県立農業試験場)

MURATA, T. NODA, M. TAKASAKI, T. and TATEISI, I.
Overwintering Habitats of the Green Rice Leafhopper, *Nephotettix Cinclicepts* UHLER,
in Northern Kyushu

緒 言

冬期間の適当な宿主を検知するため網室内での宿主別生息状況と第1回成虫の産卵状況を調査し、合せて個体飼育を行ない、かつ越冬環境別の密度を拘取調査によって調査した。

実験材料と方法

1. 網室内の生息密度、産卵に関する調査

面積1.02m×2.15m 高さ1.55mの網室に各宿主を栽培し、幼虫約1,000頭を放飼し、11月11日より生息密度調査を行なった。調査法は直径13cmのガラス円筒をかけその中の虫数を生息数とし、産卵状況は第1回成虫の羽化期から各宿主40莖を抜きとり分解調査した。

2. 個体飼育による宿主別の生存期間

径1.8cm 長さ18cm の試験管内で宿主別に個体飼育を行ないツマグロヨコバイの生存期間死虫数を調査した。

3. 野外での生息密度調査

小麦畑、畦畔休閑田を50回拘取調査した。

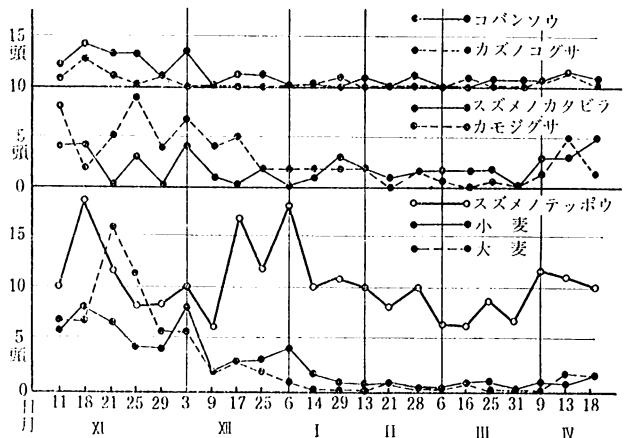
調査結果および考察

第1図の結果からスズメノテッポウが全期間をとおして最も生息数が多く良好な宿主となりうるようである。大麦、小麦は調査初期に生息数が多くなっている

が、これは他の宿主に比較して生育初期の条件が、生息に好都合であつたためではないかと考えられる。スズメノカタビラ、カモジグサ、コバンソウ、カズノコグサはいずれもスズノテッポウにくらべ生息数が少なかった。

宿主別に産卵調査をすると第1表に示すように、カモジグサを除く全宿主に産卵が認められたがスズメノテッポウに最も多く、ついで大麦、スズメノカタビラ小麦の順であつた。生息密度の低かつた大麦、小麦にもかなりの産卵を見ている事は、網室内における特殊環境の結果とも考えられる。

第1図 網室内宿主別生息密度

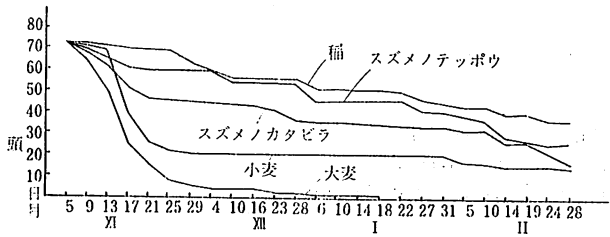


第1表 宿主別産卵調査 (各40莖調査)

項 月日	小麦			スズメノカタビラ			大麦			カズノコグサ			スズメノテッポウ			コバンソウ			カモジグサ		
	産卵莖	卵塊数	総卵数	産卵莖	卵塊数	総卵数	産卵莖	卵塊数	総卵数	産卵莖	卵塊数	総卵数	産卵莖	卵塊数	総卵数	産卵莖	卵塊数	総卵数	産卵莖	卵塊数	総卵数
4月8日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	4	0	0	0
13日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
18日	0	0	0	1	1	7	1	1	11	1	2	15	2	2	18	0	0	0	0	0	0
23日	2	2	8	3	4	22	3	4	16	0	0	0	4	4	25	0	0	0	0	0	0
28日	1	2	11	1	2	2	2	2	13	0	0	0	3	4	5	0	0	0	0	0	0
5月4日	1	1	6	2	2	11	3	3	16	1	1	6	6	7	33	0	0	0	0	0	0

(* 中外製薬)

第2図 食飯植利別生存数



第2図に示すように小麦、大麦では早く死亡する個体が多く、生存期間が長い宿主は稲、スズメノテッポウ、スズメノカタビラであつた。

野外における生息状況調査では休閑田に生息密度が

高く、次いで畦畔、小麦畑であつた。この事は休閑田にスズメノテッポウの自生が多い結果によるのではないかと思われる。

以上の調査から越冬期のツマグロヨコバイの生息密度は野外に生育する雑草の種類と密接な関係があり、特にスズメノテッポウが生育する休閑田が良好な越冬

場所となつている事がうかがわれる。従つて発生予察の立場から、越冬期のツマグロヨコバイの動態を調査する地点として、北部九州においてはスズメノテッポウの自生が多い休閑田が適当と考えられる。